

機構内のURA等による研究力強化に関する情報共有と、機構の各機関職員の皆様への周知を目的として、NINS bulletinを発行しております。発行：研究力強化推進本部

トピック

戦略的国際研究交流加速事業について

戦略的国際研究交流加速事業は、各機関が海外トップクラスの研究機関との国際共同研究を発展させる、あるいは新たに開始するための人的相互交流を支援するものです。

本事業は、平成28年4月1日から平成31年3月末日までの3年度にわたる事業であり、本事業に申請する研究課題は最長3年にわたることが可能です。なお、複数年度にまたがる課題については、年度毎の実施報告書に基づいて審査し、翌年度の配分額の変更を行うことがあります。

本事業では、以下の3つのタイプの事業を実施しています。

【タイプA】海外トップレベル研究機関との国際研究交流の加速（1件あたり各年度1000万円以内）

【タイプB】各分野の将来を担う国際的な若手研究者の育成（1件あたり各年度500万円以内）

【タイプC】研究連携構築・加速に向けたワークショップ等への招へい・受入れ及び派遣（1件あたり各年度300万円以内）

本事業により、事業計画の実施に必要な以下の経費をまかなうことができます。

- ① 研究者招へい、若手研究者(ポスドク・大学院生を含む)の受入れ・派遣に係る旅費等
- ② 事業実施責任者、事業実施副責任者及び連携機関の主連携研究者等の渡航費
- ③ 国際共同研究を遂行するための諸費用

<平成28年採択プロジェクト>

タイプ	プロジェクト名	事業実施責任者	海外連携先
A	すばる新規観測装置CHARISの開発・組立・立上げ・試験観測による系外惑星探査研究の新しい地平線を開拓する	教授 有本 信雄	プリンストン大学
A	核融合科学研究所を中核としたヘリカル核融合科学研究所方式核融合研究国際ネットワークの強化と先導	教授 横山 雅之	マックスプランクプラズマ物理研究所 スペイン:エネルギー・環境・技術研究センター(CIEMAT) プリンストンプラズマ物理研究所(PPPL) オーストラリア国立大学
A	核融合及び宇宙プラズマ物理研究の融核融合科学研究所的展開	特任教授 岡村 昇一	プリンストン大学 マックス・プランク協会
A	国際共同研究による器官形成の理解に向けた統合的アプローチの確立	教授 上野 直人	プリンストン大学
A	欧米の学術協定相手機関を中心とした分子科学研究所国際共同加速事業	教授 小杉 信博	ベルリン自由大学 ヘルムホルツ協会ベルリン研究センター パリ国立高等化学学校 ローレンスバークレー国立研究所 プリンストン大学 マックマスター大学
B	先端電子顕微鏡・光学顕微鏡技術等を生理学研究所用いた生体各階層における構造機能関連解析技術ネットワークの構築	教授 鍋倉 淳一	マックスプランク・フロリダ研究所 ハーバード大学 McGill 大学
C	東アジア 惑星科学・探査 夏の学校	国立天文台 教授 竝木 則行	China University of Geosciences Korea Astronomy and Space Science Institute
C	チュービンゲン大学との国際共同研究を生理学研究所見据えた研究交流	教授 南部 篤	チュービンゲン大学

※ 国立天文台・有本教授の課題のみ単年度事業

肝心な国際情報収集・発信はface-to-face で！

唐牛 宏(プリンストンリエゾンオフィス)

いまやインターネット時代、かなりの情報はネット経由で手に入ります。．．．

が、こんな場合はありませんか？？

- ・これはと思う研究グループがあってホームページを検索するが、もう少し突っ込んだ、内情を知りたい
- ・国際研究会で知り合った相手とメールのやり取りをして、お互い共同研究に関心があるが、本気度がわからない、どの程度の研究室なのか、resources は？？

そのときは、是非一言お声をお掛けください。唐牛はプリンストン大に駐在しています。皆様のカウンターパートが米国東海岸ならばもちろんのこと、カナダからテキサスまで北米大陸のどこにでも飛んで行って、相手の顔色をよく見ながら、できるだけ意図を斟酌して、メッセージャー、リエゾンの役を果たすのが私のミッションです。

また、機構以外でもRUネットワークの方などからの質問や要望に応えるのも大学共同利用期間の役割と思っていますので、これも耳にしたらご連絡ください。

先端的国際共同研究の推進に少しでも役に立ちそうな情報・提案・意見をお待ちしています。

研究力強化推進本部ボンオフィスの紹介

大西智之(ボンオフィス)

本機構は2014年10月から研究力強化推進本部ボンオフィスを設置しています。本施設はドイツ科学センター・ボン(Wissenschaftszentrum Bonn)に所属しており、ドイツ学術交流会(DAAD)及びドイツ研究振興協会(DFG)の各本部に近接しています。私は2016年10月からボンに滞在し、この施設の整備・運用に携わってきました。この施設内には日本学術振興会ボン研究連絡センター及び筑波大学ボンオフィスも入っており、両機関とも連携してドイツさらには欧州における日本の学術研究機関の交流拠点としての役割も担っています。詳細はこちらのHPをご覧ください。

http://www.wissenschaftszentrum-bonn.de/ueber_uns/netzwerk

私はもうすぐ帰国しますが、Milos Skoric教授(2月からボンに着任)が4月から私の後を引き継ぐこととなります。今後、Skoric教授の欧州における強力なコネクションにより、ドイツはもとより欧州全地域との連携に弾みがつくと思いますので、「欧州で新たな機関と研究交流をしたい」、「欧州における情報収集がしたい」等、各種相談があればぜひボンオフィス(bonn@nins.jp TEL +49 228 5226 7261)までご連絡ください。また、ドイツにお立ち寄りの際には、ぜひボンオフィスにも足を運んでいただけると嬉しく思います。



Milos Skoric教授

大西智之CRA

本部

I-URICフロンティアコロキウム開催(3月2-3日)

3月2-3日の2日にわたり、ホテルアソシア静岡にて、I-URICフロンティアコロキウムが開催されました。これは、第3期中期目標・中期計画(4機構連携)に基づき、自然科学研究機構をふくめた4機構の研究者が集い、テーマごとに研究について語り、異分野融合を構想する機会として設定されたものです。I-URICとは、大学共同利用機関法人の英語名(InterUniversity Research Institute Corporation)の略称です。

今回は、2015年に決定した大テーマ『人・ヒト・人間学』のもと、「共生・共存と多様性の維持」、「知性と人工知能」、「性・ジェンダー・社会」の3つのテーマについて、4機構から60名ほどの研究者が集まり、夜遅くまで活発な議論を行いました。

自然科学研究機構からは、座長として本部の小泉周と真野昌二助教(基礎生物学研究所)、さらに小森機構長・金子理事も加わり、15名の研究者がそれぞれの分科会に分かれ熱い議論に参加しました。

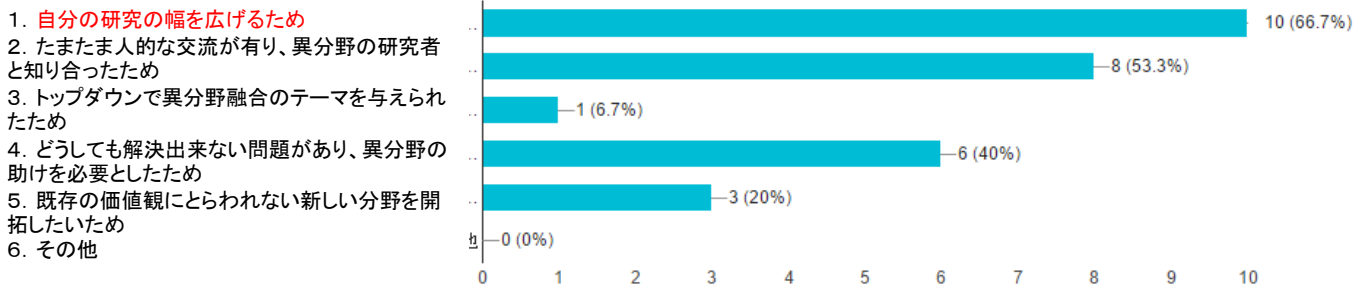
「若手研究者による分野間連携プロジェクト」に関するアンケート調査より 若手研究者の異分野融合研究への指向性について

2月3日に開催された若手研究者による分野間連携プロジェクトの成果報告会の中で、1月に機構内で実施した異分野融合・分野間連携に関するアンケート調査の結果を公表しました。

アンケート結果をみると、若手研究者は、「自分の研究の幅を広げるため」異分野融合による研究を推進しようと思うものの、「連携相手が見つからない」「分野外の若手研究者と出会いの場がない」など、また、時間不足により異分野融合研究に足を踏み出せない現状があるようです。

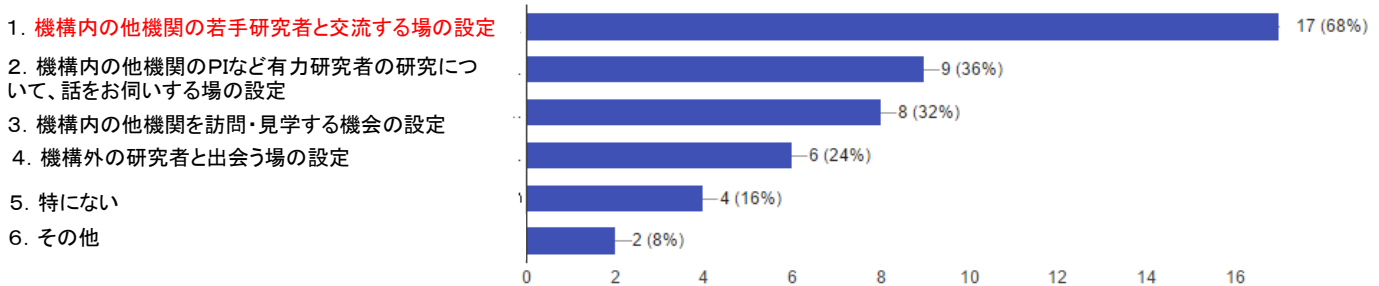
○異分野融合研究を行ったことがある人 アンケートより

Q3.1 異分野共同研究をどうして行おうと思いましたか？（複数可）（15件の回答）



○分野間連携プロジェクト 代表者 アンケートより

Q9.1 「出会いの場」について、機構に期待することはありますか？（複数可）（25件の回答）



自然科学研究機構野辺山展示室、平成29年度よりオープン決定

前回のNINS Bulletinで紹介された野辺山展示室ですが、広報委員会の審議により平成29年度より自然科学研究機構野辺山展示室として通年でオープンすることが決定されました。野辺山へおいでの際は、ぜひお立ち寄りください。



戦略的国際研究交流加速事業専任のポスドクの雇用

岡村昇一

本加速事業の「核融合及び宇宙プラズマ物理研究の融合的展開」では、3年計画の2年目と3年目の二年間に国際共同研究専任のポスドクを雇用して、共同研究の成果を上げることを考えています。今回はポスドクの公募と審査においても、加速事業の枠組みを活用して国際交流の実績を高めることができました。機構とプリンストン大学とで結んだ交流協定に基づいて公募案内を双方で掲示し、募集受付の取り扱いも双方で行ないました。その過程においては可能な限り国際的に共通の基準を設定し、審査委員会は双方から委員を出すことによって国際審査委員会を組織しました。17人の応募者の中から選び出した4人に対して国際面接を行い、最終的にはイタリアの女性若手研究者を採用することができました。平成29年度は、このポスドクにまず核融合研で二ヶ月間研究を進めてもらい、その間に核融合研に限らず日本の多くの研究者との接点を構築してもらいます。その後このポスドクを20ヶ月間プリンストン大学に派遣し、日米間の国際交流の接点としての研究を進めてもらいます。2年間の最後に、核融合研でさらに二ヶ月間まとめの研究を行い、国際共同研究の仕上げをする計画です。

ビデオ「子どもたちの将来のために」の制作

ビデオ編集担当グループ(松岡啓介(主査)他7名)

研究所紹介ビデオを更新しました(昨年度ほぼ10年ぶりに)。日本語版と英語版、各々15分ものです。ホームページでご覧になれます。市民の方々はよく研究所を訪問されますが、LHD装置などを見学する前に研究所の概要を知っていただくために、ビデオは欠かせません。

引き続き、今年度はそれらの短縮版(11分もの)を制作中です。短縮版を必要とする理由は主に次の2つです。1) やや専門的で難しいと思われる箇所をカットする(来訪者に応じて)、2) 滞在時間は短くて1時間という場合がありますので、その場合15分は長過ぎるためです。短縮版では、新たにキャラクターを登場させることとなり、所内で公募を行った結果、管理部の女性の方のデザインが選ばれました。

分子科学研究所

分子科学研究所における国内外への情報発信・広報力強化

分子科学分野の研究を社会一般に説明することは、日常生活に深く関わる研究であるにもかかわらず、目には見えないミクロな系や自然の法則等を説明することになり、研究者による口頭説明を行っても対象者によって理解度が異なる状況でした。この問題を少しでも改善し、更に、体験を通じてより一層理解を深めていただくため、新たな展示設備の導入と補強を進めています。

また、海外の学術研究機関に対して研究力強化に即した紹介ビデオがなく、また本事業開始後に組織を改編したこともあり、新体制での関係組織を中心とした「海外学術研究機関向けの最新研究プロジェクト紹介ビデオ」の整備に取り組んでいます。これにより、新たな機能強化の一環として分子科学研究所の現状や魅力を発信し、国際的なプレゼンス並びに知名度が向上することを期待しています。



端末を使って計器を遠隔操作している様子を撮影



学生、海外インターンシップ生、スタッフが協力して実験している様子を撮影